



第97回 イギリスの市民革命①

1 スチュアート朝の成立とイギリス社会

- 1603年、()が死去すると、()した。
→スコットランド王が()としてイギリス王となった。
※この王朝を()という。

<当時のイギリス社会>

- 宗教的には、イギリス国教会に加え、カトリック、さらに()と呼ばれるカルヴァン派の人々が存在していた。
- 身分的には、自分の農地を持つ()、地主層で議会で力を持つ()、商工業に従事する市民層も力を持ち始めていた。
→彼らの中には、ピューリタンが数多くいた。

2 国王と議会の対立

☆イギリス (スチュアート朝) (1603~1649、1660~1714年)



ジェームズ1世
スコットランド王としてはジェームズ6世。血筋的には、ヘンリ7世の孫の孫にあたる。

- ◆ () (在位 1603~1625年)
 - () を唱えて絶対王政を行い、議会を無視した。
 - イギリス国教会の立場から、ピューリタンやカトリックを弾圧した。

- ジェームズ1世の弾圧から逃れるため、イギリス国外に脱出する者もいた。
- 1620年、() と呼ばれるピューリタンを中心とした人々は、メイフラワー号に乗ってアメリカの() に上陸した。
→イギリス人によるアメリカ植民のさきがけとなった。



チャールズ1世
兄が早死にしたため、王位を継承した。議会に理解のあった兄が王であれば、革命は起きなかったかもしれない。

- ◆ () (在位 1625~1649年)
 - 父と同じように絶対王政を行い、議会を無視し続けた。
→1628年、議会は() を提出し、議会の尊重を請願した。
→チャールズ1世は、反対に議회를解散させた。

- 1639年、() が起きた。
→国王は鎮圧費用を集めるため、しかたなく議会を開いた。
→国王と議会は激しく対立し、わずか3週間で解散となった。
※そのためこれを() という。

- 反乱に敗れた王は再び議会を開いたが、対立は避けられず内戦状態となった。
→これにより1642年、() (イギリス革命) が勃発した。
※なおこの議会は、1653年まで13年間継続したので() という。

3 プューリタン革命の党派と経過

- () …絶対王政とイギリス国教会を支持する、国王や貴族のグループ。
- () …王政を維持しつつ、議会中心の政治を行おうとする、ジェントリや大商人のグループ。
- () …王政を廃し、議会中心の共和政を行おうとする、ジェントリ、ヨーマン、商工業者のグループ。
- () …王政を廃し、普通選挙の議会による共和政を行おうとする、貧農や小市民のグループ。

真正水平派 …土地を共有して完全平等を目指す、極貧に苦しむ人々のグループ。

- ・議会派のうち、独立派を指導する()は、()を組織して王党派を圧倒し始め、1645年にネーズビーの戦いで王党派を破った。

- ・1648年、クロムウェルは()した。
- ・1649年、国王()した。
- ・1649年、クロムウェルは水平派に大弾圧を加えて、政治の主導権を握った。



ネーズビーの戦い

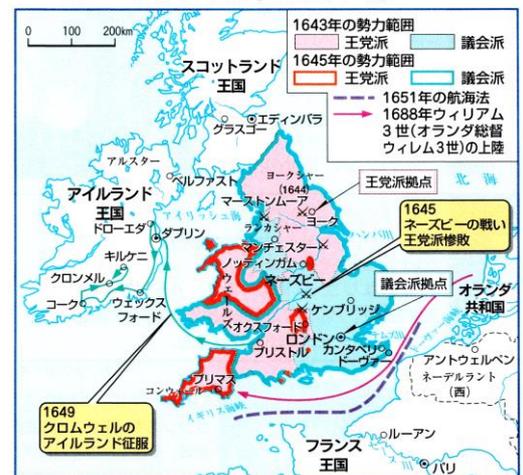
鉄騎隊を率いるクロムウェルは、議会派の副司令官を務めた。この戦いの結果、議会派の勝利は決定的となった。イギリス革命の趨勢を決めた一戦である。



チャールズ1世の処刑

イギリス王チャールズ1世は、裁判を経て斬首された。国王らしい、非常に堂々とした最期であったと伝えられる。

ピューリタン革命(17世紀中頃)



4 クロムウェルの独裁

- ・チャールズ1世の処刑後、イギリス史上唯一の() (コモンウェルス) が開始された (1649~1660年)。
- ・クロムウェルは、ピューリタンの思想に基づく厳格な政治を開始した。
- ・絶対王政が終わったことで、経済の自由な発展を促し、市民の立場が強まった。



クロムウェル

ジェントリ出身の軍人で、ガチガチのピューリタン。マジメすぎるクロムウェルは、演劇など市民の娯楽をも禁止してしまい、徐々に人気を失っていった。

- ・1649年、() とスコットランドを征服した。
→アイルランドでは土地が没収され、事実上イギリスの植民地とされた。
- ・1651年、() に打撃を与えるため() を制定した。
「イギリスとその植民地との貿易は、イギリスか貿易相手国の船を使用」
→そのため3度にわたる() が始まった。
→イギリスが勝利し、オランダは徐々に衰退していった。
- ・1653年、() に就任し、独裁者となった。